

歐洲戦争と科學振興のジレンマ

—— 中國における第一次世界大戦報道とその思想的影響 ——

小野寺 史 郎

はじめに

一、中國における大戦報道 —— 『東方雜誌』を中心に ——

(一) 『東方雜誌』概要

(二) 『東方雜誌』の大戦報道

(三) 杜亞泉の大戦観

二、多様な大戦観とその衝突

(一) 『新青年』の大戦観

(二) 『新青年』と『東方雜誌』の論争

(三) 『科學』の大戦観

おわりに

はじめに

筆者はさきに第一次世界大戦と中國の關係について文章を書く機會を與えられた⁽¹⁾。しかし自身の力不足から、様々な問題を今後の課題として残さざるを得なかった。中でも氣がかりだったのは、同時代の中國における大戦報道や大戦觀について、ごく断片的な事例を示したにとどまり、より踏み込んだ検討には至らなかったことである。

中國近代史の分野において、大戦の中國思想界に對する影響についての研究がこれまででなかったわけではない。従來の研究は主に、ドイツの敗戦と戦後歐洲における平和主義・世界主義の潮流から、清末以來の社會進化論の流行が終熄し、クロポトキンに代表される互助論が高く評價されたこと、社會主義への關心の高まり、西洋文明への懷疑と文化ナシヨリズムの登場、科學萬能論への見直し、といった點に着目してきた⁽²⁾。しかし、これらはいずれも大戦の結果が明らかにした後の中國思想界の動向に關する指摘であり、大戦の最中、勝敗の行方がいまださだまらない時期に、中國の知識人たちがこの戦争をどうとらえていたのか、如上の戦後中國思想界の動きはそれとどのような關係にあるのかという問題は、これまで十分に論じられてきたとは言いがたい。

大戦についての報道が中國でも相當の規模でなされ、當時から知識人たちの注目を集めていたこと自体は間違いない。だとすれば、その報道は具體的にはいかなる形式でなされ、どのような特徴をもつものだったのか。それは、當時の中國の思想界・言論界にいかなる影響を及ぼしたのか。そしてその影響は中國近代思想史全體の展開の中にどのように位置づけられるのか。本稿は、大戦期の中國における代表的な雑誌のいくつかを取り上げて検討することで、以上の問題についての初歩的な見取り圖を示すことを試みる。

一、中國における大戦報道 —— 『東方雜誌』を中心に ——

(一) 『東方雜誌』概要

一九一四年七月に第一次世界大戦が始まると、中國においても新聞・雑誌が外電などを元に日々報道を展開した。また、さまざまな出版社から大戦や歐洲の國際關係を扱った書籍が出版された。こうした中で、大戦という話題を最も大々的に取り上げたのが、當時の中國最大の出版社であった商務印書館（上海）の刊行する『東方雜誌』だった。

『東方雜誌』（英題は *The Eastern Miscellany*）は日本の『太陽』や英米の *The Review of Reviews* をモデルとした総合雑誌で、一九〇四年の創刊当初は官報や他の新聞・雑誌の記事を収集・轉載して誌面を構成していた。こうした形式の刊行物は、黎明期の中國の出版界においては一般的であった。一九一一年に「世界の政治・學術・文藝の精華を萃めて國民の研究・討論の資料となす」ことを掲げ、歐米・日本の雑誌記事の翻譯・紹介記事と巻頭の論説という形に構成を改めた。第一六卷（一九一九年）まで月刊、第一七卷（一九二〇年）以降は月二回刊となる。發行部数は一九一八—一九一九年頃で二—三萬部とされ、この時期の中國においては最大であった。⁽³⁾ 王奇生は近代中國の雑誌を商業刊行物・機關團體刊行物・學界同人雑誌の三つに分類したが、『東方雜誌』はそのうち商業刊行物の代表的なものとされる。⁽⁴⁾

第一次世界大戦期にこの『東方雜誌』の主編（編集長）を務めたのが杜亞泉（一八七三—一九三三）である。名は煒孫、筆名は僉父、高勞、陳仲逸など。浙江省紹興の人で、一八九八年に紹興中西學堂算學教員となり、教鞭を執りつつ日文と理化を學んだ。一九〇〇年に上海で科學雜誌『亞泉雜誌』を刊行。一九〇四年に商務印書館編譯所理化部主任となり、一九一二年から一九二〇年まで『東方雜誌』主編を務めた。⁽⁵⁾

(二) 『東方雜誌』の大戦報道

『東方雜誌』は、大戦開始直後の第一一巻第二號（一九一四年八月一日）に、サライエヴォ事件から開戦までの経緯を解説した杜亞泉「歐洲大戦争開始」を掲載した。またやはり杜亞泉が上海の中西各紙や東京の新聞などに基づいて戦争の推移をまとめた「大戦争續記」を第一一巻第三號（一九一四年九月一日）から第一四巻第七號（一九一七年七月十五日）まで一二回にわたって斷續的に掲載した。これらは大戦の経過を總合的に報じたものだが、それ以外にも大戦が歐米社會や國際關係に及ぼした様々な影響を扱った個別の記事や論説も膨大な數に上る。特に第一三卷（一九一六年）の半ばまでは、同誌誌面の大半を大戦關聯の記事が占めている。

こうした『東方雜誌』の大戦報道にはどのような特徴があったのか。

第一に、前述の『東方雜誌』の編集方式からもわかるように、これらが基本的には日本・歐米の新聞・雜誌記事を翻譯紹介したものだということが挙げられる。翻譯・轉載元が明記してあるものとして最多は日本の『太陽』⁽⁶⁾で、以下、『外交時報』『日本及日本人』『中央公論』が續き、他に『歐洲戦争實記』『二十世紀』『新公論』『東京日日新聞』『科學世界』『新日本』『東京朝日新聞』といった名前が見える。英米では *The World's Work*, *The Review of Reviews*, *The Outlook* が比較的多く、他に *Collier's Weekly*, *The Little Paper*, *The Pacific Monthly*, *The Far Eastern Review*, *McClure's Magazine*, *The New York Times*, *The Globe*, *The Atlantic*, *Current Opinion*, *The Independent*, *The London Times* などが確認できる。稀に歐洲在住の中國人からの寄稿なども見られるものの、『東方雜誌』自體が獨自に特派員を現地へ送ったという様子はない。結果として、『東方雜誌』の大戦報道の内容は、これらの引用元の雜誌の論調を強く反映したものである。

そのためか、當時の中國の他の新聞や雜誌が、一九一四年九月に始まる日本軍の山東半島上陸とその後の推移を大きく

取り上げているのに對し、『東方雜誌』の大戦關聯記事には歐米を中心とする國際情勢や歐洲の戰況に關するものの割合が高く、むしろ青島問題や二十一か條交渉に關する記事・論評は控えめとなっている。

第二に、大量の寫眞・圖版の使用である。この時期の『東方雜誌』は口繪や記事内に歐洲戰場や各國の指導者などの大量の寫眞を掲載している。同時期の新聞では、稀に歐洲の簡單な地圖が載る程度で寫眞はほとんどない。他の主だった雜誌と比較しても、『東方雜誌』の寫眞掲載量は明らかに突出している。これらの寫眞の多くはやはり記事引用元の雜誌から轉載したものとされるが、『東方雜誌』だけがそれらを大量に掲載できたことからは、大手出版社である商務印書館の印刷技術や編集經費上の優位が見て取れる。

第三に挙げられるのは、科學・技術への高い關心である。『東方雜誌』の大戦に關する翻譯記事の中では、新兵器や新發明に關するものが非常に高い割合を占めている。題名を挙げると「軍事飛艇之通信術」「大戰爭中之摩托車」「克虜伯砲廠與攻城砲」「飛行機與戰爭」「說奧國新式榴彈砲」「造艦說」「德軍利用含毒氣體於戰場」「德國四十二生動的礮之真相」「最新發明之猛烈軍用品」「毒氣彈之性質及功效」「德國潛行艇之解剖」「潛水艇」「鐵路與戰爭」「歐戰中之犬」「說水雷」「世界大兵工廠之美國」「空中戰術」「可恐之超潛航艇」「海戰術之新傾向與造艦政策」「戰爭與發明」といったものがそれに當たる。これらは一方では前述のように、『東方雜誌』の記事引用元の雜誌の傾向を引き継いだものと考えられる。ただ他方で、同時期の『東方雜誌』が國慶日（二〇月一〇日の辛亥革命記念日）の閱兵に登場した中國軍の飛行機の寫眞も掲載していることなどから、これらの記事の目的の一つには、中國社會に科學・技術に關する知識を普及させることもあったと考えられる。これは前述の經歷からもうかがえるように、かねてより中國における科學・技術の振興を訴えていた杜亞泉の問題意識によるものであろう。

ただ一方で、潜水艦や飛行船の詳細な構造や軍艦の新戰術うんぬんといった記事が、當時の中國の一般讀者にとつて何らかの直接的な有用性があつたとも考えにくい。讀者からすれば、これらには多分に珍談奇談に屬する、娯樂としての側

「面もあつたと考えられる。實際に當時の『東方雜誌』讀者がこれらの記事に對しどのような感想をもつたかについては今後の検討を待たねばならない。しかし前述のように商業雜誌である『東方雜誌』がこうした誌面作りを數年にわたり續けたことから、これらの記事は讀者の一定の支持を得ていたと考えるのが自然であろう。

(三) 杜亞泉の大戦観

前述のように、『東方雜誌』の誌面は海外の新聞・雜誌の翻譯記事と、巻頭の論說から構成される。この時期の論說の多くは主編である杜亞泉によるものだが、その内容から『東方雜誌』が第一次世界大戦をいかなるものとして中國の讀者に提示しようとしていたのかをうかがってみたい。

開戦直後の一九一四年九月の『東方雜誌』巻頭論說「大戦争と中國」は、ヨーロッパ各國で勞働階級の反對がある以上戦争の長期化は難しいと豫想し、その前提の上で、大戦が中國の沈滞に變化をもたらし、世界史上に新しい時代を切り開く契機となることへの期待を表明した。

今日の大戦争は、ほとんどわが國の未來の十年に變化の時代をもたらそうとしている。……今回の大戦争がわが國に關係するのは、第一にわが國民の愛國心を刺激し、第二にわが民族の自覺心を喚起したことである。……歐洲各國が、或いは次第に窮兵黷武の非計を悟り、武装和平の保ち難きを知り、一變して非武装の平和となり、各國國民が、互いに好意によつて結ばれ、國民の愛國心、民族の競争心が、砲火に表れず、工商事業、文化事業の中に表れるのであれば、今回の大戦争の血が、或いは前世紀の穢惡を一度に洗い流し、新世紀の平和を培養するかは、いまだ知ることができない。¹⁰⁾

杜亞泉は一九一五年一月號にも「社會協力主義」と題した論說を載せ、現在歐洲では國家主義と平和主義が激しく衝突しているが、この二つの主義はいずれも中國が生存を圖るのに必要である。しかし極端な國家主義は軍國主義・民族的

帝國主義につながり、極端な平和主義は世界主義・社會主義につながるので、協力主義によって、この二者を調和させた平和的國家主義・國家的平和主義を目指さなければならぬ、とした。⁽¹⁾

同年五月の「戦争と文學」と題した論説も主旨はこれに近い。

大抵勇壯な著作は、國民の功名心を引き起こすことができ、偉大な思想を生む。憤激の著作は、國民の敵愾心を發生させることができ、忠勇の功績を明らかにする。いずれも戦争を鼓舞する効果がある。……憂愁慘痛の作に至っては、國民に平和を愛好させることができ、戦争を鎮靜する効果がある。しかし往々にして國民は文弱に流れる。我が國の近時の尙武精神の喪失も、この種の文學が重大な原因に違いない。……我が國の文學は、國民の悲惨への同情を喚起しており、一方でもちろんそれによって横暴な行爲をなくすことができた以上、もう一方ではそれによって俠烈の勇氣を鼓舞すべきである。これが今日の文學者の責任にはかならない。⁽²⁾

ここで述べられているのは、「尙武精神」と平和は兩方とも必要だが、現在の中國では「鎮靜の文學」に偏っているため、戦争を稱揚する「鼓吹の文學」も増やすべきだということである。このように大戦初期の杜亞泉の議論は、戦争と平和のもたらす利點・弊害の間でバランスを圖る中庸の立場を取り、その上で大戦が中國の政治・社會の現状を變革する機會となることを願うというものだった。

しかし、こうした議論が前提とした、大戦が比較的早期に終息するという豫想は、その長期化と泥沼化によって裏切られることになる。開戦後一年、二年が経ち、歐洲戦場の慘禍が中國でも報道されるのに従い、戦争のもたらす利點、という議論は次第に影をひそめていく。かわって杜亞泉の論説の中心となってくるのが、こうした悲惨な戦争を續ける西洋文明に對する疑念と、それに對置すべき新たな價值としての東洋文明、という發想である。一九一六年一〇月の『東方雜誌』に掲載された「靜の文明と動の文明」はその議論の圖式を最も端的に示した文章である。

歐戰發生以來、西洋諸國は日々その科學が發明した利器によってその同類を慘殺し、悲惨激烈の状態は、ただわが

國の歴史にないだけでなく、世界にもこれまでなかったものである。われわれはこれまで羨望してきた西洋文明に對し、すでに懷疑の意見を抑えられず、わが國民の西洋文明を眞似る者も、道德あるいは功績の上で、それ〔西洋文明〕がわれわれに信賴されるゆえんを示せなくなっている。そうであればわれわれは今後、その盲従の態度を變え、文明の眞價の所在を審らかにしないわけにはいかない。われわれの意見では、西洋文明とわが國固有の文明は、性質の違いであつて、程度の差ではない。わが國固有の文明は、西洋文明の弊害を救ひ、西洋文明の行き詰まりを救うに足る。……西洋社會は常に戰爭の中にあり、その間の平和の時期は戰爭後の休養期間、あるいは次の戰爭の準備期間である。戰爭が常態であり、平和は異常事態である。わが國の社會は常に戰爭を避けることを求め、ただ自然界の競争淘汰の公理は廢止できないので、地は狭く人口過剰で生計逼迫の日が天演の迫る所となれば、避けるに避けられず、突然社會間の擾亂が起き、戰爭によつて平和を回復せざるを得なくなるのである。平和が常態であつて、戰爭は異常事態である。……數年前わが國民でフランスのパリに流入し造花を賣つて口を糊していた者があつたが、パリ市會が口うるさく言つて、公使館が費用を出して歸國させた。大戰開始以來、各國でしばしば密かに中國労働者を招募することがあり、フランス政府は議案を議院に提出して、試しに中國労働者五〇〇〇人を招募し、兵器工場で働かせるとするに至つた。……以上で述べたのは、物質上の交換が、精神上の交換に至つた、最も顯著なものである。……將來の西洋社會にも必ず若干の變化があり、わが國に影響を受けるだろう、その兆しはすでに見えている。¹³⁾

進んだ西洋を追いかける東洋という構圖を退け、東西文明の差を程度ではなく性質の違いとした上で、戰爭の西洋文明と平和の東洋文明を對置し、今やむしろ西洋が東洋から影響を受けるべきだ、とする。當時始まりつつあつた中國労働者のフランス派遣の事例が論據として取り上げられているのが興味深い。

杜亞泉は一九一七年四月の「戦後の東西文明の調和」でも次のように述べる。

今回の大戰は、西洋文明に顯著な破綻を露わにさせた。これはわたしの偏見の言ではなく、およそ現代文明を研究

する者であれば、このような感想をもたないものはほとんどない。……十九世紀に至って科學が勃興し、物質主義が大いに盛んになり、さらにダーウインの生存競争説と、ショーペンハウアーの意志論から、展開して、強權主義、奮闘主義、活動主義、精力主義となり、それが大いに發展して、帝國主義、軍國主義となつた。……宗教本位のヘブライ思想が、破壊されただけでなく、理性本位のギリシア思想も、全く捨て去られてしまつた。……〔中國も〕近年は科學思想輸入の結果、往々にしてその利に目がくらんでその害を忘れ、その末を救つてその本を捨て、物質的な刺激を受け、欲は日々盛んにして望みは日々ぜいたくになつてゐる。⁽¹⁴⁾

こちらでも、科學・物質に代表される西洋文明の行き詰まりを指摘し、精神的要素を重視する東洋文明の優位が述べられている。

こうした杜亞泉のいささか圖式的・通俗的な東西文明論の内容自體については、既に多くの研究があるためここでは深く論じない。⁽¹⁵⁾ただ、『東方雜誌』に關して言えば、興味深いのは、このように西洋||科學||戰爭に對する否定的な見方を論説で提示する一方で、歐洲戰場における最新の兵器や戰術に關する大量の記事と寫眞も引き續き掲載されており、誌面構成にある種の混亂が見られることである。このあたりから、特定の思想信條を訴える政論誌ではなく、あくまで外國雜誌の記事の紹介を中心とする商業誌、という『東方雜誌』の性格がうかがえる。

さらには、こうした杜亞泉の主張と相反する内容の讀者の投稿も同誌には掲載されている。

私に言わせれば、平和の二字もまた、幽靈の類である。天下に必ずしもそれは存在しないのに、人々の心理には必ずこの考えがある。いま試しに世界の歴史について、その記述してある大事の中で、戰爭の歴史を除けば、殘る事績は、いかほどであろうか。……もし私の説が誤りでないならば、どうして平和などというものがあろうか。戰爭繼續の間の小休憩に過ぎない。⁽¹⁶⁾

ここで述べられているのは、戰爭こそが常態であり、平和などというものは幻想にすぎないという主張である。西洋で

は戦争が常態で平和は一時的なものだが、東洋では平和が常態である、として、戦争と平和の問題を東西文明の差異に回収する杜亞泉の議論は、こうした見方に對する回答としての意味もあつたと考えられる。

ただ一方で、戦争と平和のバランス、あるいは東洋の平和や精神文明の價値を説く杜亞泉の穩健・中庸の議論に對し、當時の急進的な讀者、特に知識青年はある種の物足りなさを感じていたということも推測される。こうした讀者の需要に應じることでこの時期に影響力を擴大していくのが、次節で取り上げる『新青年』である。

二、多様な大戦觀とその衝突

(一) 『新青年』の大戦觀

中國近代史において一般に一九一〇年代後半の思想界の動きとして大きく取り上げられるのが「新文化運動」である。これは、雑誌『新青年』と北京大學を中心に展開された文化刷新運動で、西洋思想の大々的な導入と、傳統的な儒教道徳・家族制度に對する批判、白話文學の提唱、女性解放などを唱えたものとされる。しかし、この新文化運動がなぜこの時期に始まったのかについては、辛亥革命（一九一一年）によって共和國が樹立されたにもかかわらず、その後も長く政界の混亂が續いたことへの反省から、むしろ必要なのは社會の改革であるという思潮が生まれた、というように、専ら中國の國內要因から説明されることが多く、同時期に起きていた第一次世界大戦と關聯づけて論じられることは稀である。しかし、前述のようにまさに大戦による西洋文明への疑念が生じたこの時期に、中國の傳統文化を批判し、西洋化を訴える主張が展開されたのはなぜか、という點についても本來であれば検討が必要なはずである。そこで以下ではこの問題に焦點を當てて、大戦と中國思想界の關係を論じてみたい。

一九一五年九月、『青年雜誌』が創刊される（佛題が *La Jeunesse*）。一九一六年九月の第二卷第一號より『新青年』と改題。月

刊の論説誌で、発行は上海の群益書社である。主編は陳獨秀（一八七九—一九四二）で、高一涵、李亦民、易白沙らが編集に加わった。著名な執筆者としては他に李大釗、胡適、魯迅、周作人らがあり、一般には前述の新文化運動の中心となった雑誌として知られる。大戦後にマルクス・レーニン主義を中國に紹介し、胡適ら自由主義者が離脱した後、陳獨秀らが結成した中國共產黨の機關誌となった。発行部数は創刊時には一〇〇〇部だったが、一九一七年には一萬五〇〇〇—一六〇〇〇部に達したと言われる。¹⁸

創刊自體が大戦開始後一年あまりを経た時期になるが、同誌に掲載された論説の中にも大戦に言及したものは少なくない。例えば一九一五年一二月に掲載された陳獨秀の代表的な文章の一つ「東西民族の根本思想の差異」は次のように述べる。

西洋民族は戦争を本位とし、東洋民族は安息を本位とする。……西洋の諸民族のごときは、好戦健闘が、天性に根づき、習俗となっており、古より宗教の戦い、政治の戦い、商業の戦い、ヨーロッパの全文明史は一字たりとも鮮血で書かれていないものはない。イギリス人は鮮血で世界の覇権を獲得し、ドイツ人は鮮血で今日の榮譽を築いた。ベルギーのごとき、セルビアのごときは、小國で大國に抗い、鮮血で自由を争っており、私が思うにそのような人の國はついに滅びることはない。その艱難に抗う氣骨を、東洋民族は或いは氣が狂ったと見なすかもしれない。しかしその萬分の一でも眞似ることができていたならば、平和を愛し安息を尊び雍容文雅な劣等東洋民族は、どうして今日の被征服者の地位にまで至つただらうか。¹⁹

興味深いのは、ここで述べられている好戦的な西洋と平和を愛する東洋という単純化された二項對立的な構圖自體は杜亞泉と同じだが、その後の『東方雜誌』が西洋に對する批判に轉じていったのに對し、『新青年』は當初の西洋觀をむしろ先鋭化させていったということである。同誌次號の別の記事でも陳獨秀は次のように述べる。

世界について言えば、この一九一六年以前と以後の歴史は、明らかに大變化を起そうとしているのではないか。歐

洲戦争は、世界に廣まり、勝負の行方は、次第に明らかになってきた。ドイツ人が失ったのは、青島と南アフリカ、太平洋植民地であり、他には寸地たりとも損なわれていない。西は英佛を拒ぎ、遠く國境を離れて、東はロシア國境に入り込み、地を奪うこと千里、バルカンに出でては、セルビアを滅ぼしている。……英國政黨政治の缺點は日ごと露わになり、義務徴兵は、勢い必ず行われるだろう。列國はドイツの強盛の源を考察し、全力を擧げて工業・化學を目指している。これらに照らせば一九一六年の歐洲の形勢、軍事、政治、學術、思想は、新たに今回の戦争の洗禮を受けて、必ず激變し、以前と大いに異なるものとなるだろう。⁽²⁰⁾

ここでは陳獨秀はドイツの勝利を豫想しており、その要因として徴兵制や科學・技術を擧げている。そこからの歸結として、戦争により科學・技術、學術、思想などが進歩するという主張がなされている。

同じく『新青年』の同人であった劉文典（一八八九—一九五八）も一九一六年一〇月の「歐洲戦争と青年の覺醒」と題した文章で次のように述べている。

ああ、〔第一次世界大戦の勃發により〕今はじめて戦闘は人生の天職であり、平和は痴人の迷夢であると知った。……この〔平和の〕二字はもともと卑劣怯懦な者の腦内の一種の幻想であり、それが世界に實現する日は絶対にない。東洋民族の衰亡は、實はこの不吉な言葉がすべての原因である。その害の烈しさはバクト菌に十倍する。……戦争は實は進化を創造する中心である。それがなくなれば世界は滅んでしまう。もしこの世界で強いて平和なるものを求めるのであれば、滅亡の二字がそれに近い。平和を愛する民族とは、自ら甘んじて滅ぼされる民族である。……願わくは吾が青年が四海の併呑を志とし、八紘の席捲を心として、諸華を改造して世界最好戦の民族とすれば、國家の榮光は永久に保たれるだろう。⁽²¹⁾

「平和は痴人の迷夢である」という表現は、前述の『東方雜誌』に掲載された「平和の二字もまた、幽靈の類である」という投稿に重なる。中庸を謳う『東方雜誌』の論調に飽き足らなさを感じた讀者にとって、戦争Ⅱ進化、平和Ⅱ滅亡と

いう『新青年』のより過激な主張はある種の吸引力をもったものと考えられる。

劉文典は次號の「軍國主義」と題した文章でも次のように述べる。

今の世界で、いやしくもこの領土を守りわが子孫を保とうとすれば、軍國主義を置いて他に道はない。今の世に生まれて、いやしくも他人の奴隸となることを免れようとすれば、軍國主義を置いて他に方法はない。今日の天下は、軍國主義の天下である。ああかの蠻氏（古代の小國の名。後述の觸氏と争った）は日々その巨砲、飛行機、潜水艦、毒ガス彈で排斥しあい、わが國を滅ぼしわが種を殺し盡くそうとしている。われらも自ら觸氏となつて彼らと奮闘力争するほかに、生き残るとんな策があるだろうか。……世に平和を迷信し、時勢に暗い者がおり、妄りにその夢境幻想が實現できることを願ひ、他日歐戰が終結し、ドイツ人は一敗地に塗れ、軍國主義もそれに隨つて滅び、世界平和は長く保たれると言う。歐洲がたとえ一時の僞平和を得たとしても、わが衰微不振の東洋民族に何のかかわりがあるのか知らないのである。けだし東洋民族中にも、ドイツに追隨し軍國主義を推進する國があつて日々わが傍らを伺つている。……わが諸華は平和を深く愛する天性を有し、軍國主義とは相容れない。民族性がかくのごとくであれば、どうして人力で改造することができようか、という人もあるかもしれない。しかしこれは好戦は人類の本性であり、進取が實は立國の源だということを知らないのである。わが諸華は人類であり、また國土を保有して數千年を經ている以上、その間に異類を捍拒し、敵國を討滅したことが、ない時代はなかつた。……わが青年兄弟が、自身の責任を自覺し、世界の潮流を廣く見たし、軍國主義が立國の根本、救亡の至計であることをよく知り、精神を奮い立たせれば、わが諸華が世界最強の民族と化すことができなるときまつたわけではない。⁽²⁾

ここではやはり中國の現状を批判すると同時に、大戰におけるドイツの奮戦を稱贊し、軍國主義が世界の潮流であるとしてこれに倣うことを訴えている。ここでも平和は幻想とみなされ、軍國主義によつて中國を「最好戰の民族」「世界最強の民族」とすることが謳われている。

一九一七年に入り、アメリカがドイツと斷交・宣戦すると、中華民國がこれに従つてドイツに宣戦すべきか否か、という問題が知識人たちの關心事となつた。戰禍を厭う世論が總じて參戰反對に傾く中で、當時の段祺瑞政權の宣戦方針に全面的な支持を表明したのが陳獨秀だつた。陳獨秀は「對獨外交」と題した文章でその理由を次のように述べた。

白哲人種がわが民族を見ることは、人類が犬馬を見るがごとくである。ドイツ人はその狹隘な愛國心を過度に用い、眼中に人なきがごとしである。かの強大な民族にあつては、確かに傲慢になりうる理由があるかもしれないが、弱者であり被征服者であるわれわれの立場からは、當然ながらかの強者・征服者に天賦の權利があるというようなことは承服できず、徹底的にこれと争うことになる。たとえ争つて敗れても、ベルギーのごとく、セルビアのごとく、民族の榮譽、國家の人格は、戦わずして屈し安逸を貪つて恥辱に甘んじる臆病者より絶對にましである。……社會にとつての戦争は、人體にとつての運動のようなものである。人體にとつて適當な運動は、健康の最重要條件である。新しい細胞の代謝は、運動によつてその作用を強める。社會にとつての戦争もまた然りである。久しく戦争のない國、その社會は必ず停滞の様相を呈す。いわんや近世の文明諸國は、戦争をひとたび經るごとに、その社會や學術の進歩を速め、新たな様相を呈してきた。われわれの進歩が停滞しているのは、戦争の範圍が小さ過ぎ、時間が短すぎるのも、重大な原因である。もし機會があつて歐洲戦争に加われれば、黃奴の血で莊嚴燦爛の歐洲に彩りを添える快舉であるだけでなく、出征軍人が得る知識や國內で戦争によつて得られる學術思想の進歩は必ず見るべきものがあるだろう。²³⁾

戦争が進歩をもたらすという主張は劉文典の文章にも見えるため、當時の『新青年』全體のトーンだつたと言つてよい。違いは、ここではドイツが一轉して一方的な批判の對象となつてゐる點である。陳獨秀は別の文章でも次のように述べる。

今回の大戦争は、古今未曾有であり、戦後の政治、學術、一切の制度の改革と進歩もまた古今稀なものとなるだろう。……今回の歐戦の原因と結果は、もとより甚だ複雑だが、君主主義と民主主義の消長、侵略主義と人道主義の消長が、この戦争に關係することは至大である。もしドイツが完全勝利すれば、無道の君主主義・侵略主義、その勢い

はますます盛んになり、その運命が百年あるいは数十年存続するかわからない。それが存続する期間、弱者には絶対に生存の道はない。⁽²⁴⁾

とは言え、白人が中國民族を蔑視するから英佛米の味方をしてドイツと戦う、という主張は明らかに論理的に破綻している。そのためこの「對獨外交」は後世の研究者の困惑を招いてきた。⁽²⁵⁾後に陳獨秀自身が強く批判することになる段祺瑞を擁護する内容が含まれることもあつてか、數年後に出版された自選集『獨秀文存』（上海：亞東圖書館、一九二二年）にもこの文章は収録されていない。

ただ、ここまでに見てきた『新青年』の大戦觀を見れば、陳獨秀のドイツ稱賛から對獨宣戰論への轉換が、唐突で無節操なものというわけでは決してなく、戦争⇨進歩という點について言えば、論理的に一貫したものだだったことは明らかである。そしてこのような大戦觀は、明確に同時期の『東方雜誌』のそれとは對立するものだった。

(二)『新青年』と『東方雜誌』の論争

大戦も末期の一九一八年九月、陳獨秀は『新青年』に「『東方雜誌』記者に質問する——『東方雜誌』と復辟問題」と題した文章を發表した。これは、『東方雜誌』に譯載された記事に儒教を擁護する内容があつたことを捉え、前年七月に起きた、清の最後の皇帝溥儀の復辟（再即位）事件にからめる形で批判した、挑發的な公開質問状である。この文章ではほとんど言いがかりに近いものまで含めて全一六項目にわたる質問が列擧されているが、その一〇番目が「『東方雜誌』に掲載された記事では」今回の戦争は、歐洲文明の權威に、大いに疑念を生じさせた」と言うが、この言葉は果たして寢言だろうか？⁽²⁶⁾というものだった。杜亞泉はこれらの質問に對し『東方雜誌』誌上で逐條反論したが、この項目については議論の餘地はないということか、「田舎の老婆が口を尖らして罵るような口ぶりで、言論家の態度ではない」と取り合わなかった。⁽²⁷⁾陳獨秀は『新青年』誌上で杜亞泉に對する再反論を行ったが、この項目に關しても「けだし歐洲大戦より以

來、科學、社會、政治など、ひとつとして飛躍的進歩のなかったものはない。それなのに歐洲文明の權威に、大いに疑問が生じたという。これは寢言でなければ何だというのか？」と自説を繰り返している。⁽²⁸⁾

實際のところあまりかみ合った議論とは言い難いが、この應酬から後に「東西文化論争」と呼ばれる中國近代史上の大論争が開始されることになる。この誌上論争を通じて『新青年』の急進的な主張を支持する若い読者が増加し、それと引き換えに『東方雜誌』は部敷を落とし、杜亞泉は同誌主編を辭すこととなる。

こうした陳獨秀の主張については、中國の現状批判という目的のために西洋文明を「擁護せざるを得なかった」ためという解釋がある。⁽²⁹⁾ たしかに、陳獨秀たちの極端な主張に、あくまで中國の現状に對する批判という目的のためにする方便、という戦略的な意圖があったことも確かであろう。そもそも陳獨秀の『東方雜誌』に對する論難自體が、『新青年』讀者擴大のための一種のネガティブ・キャンペーンだったという指摘もなされている。⁽³⁰⁾

ただ一方で注目すべきは、この時期の『東方雜誌』と『新青年』の議論の共通の基盤となっていた、西洋⇨戦争⇨科學と東洋⇨平和という構圖である。この構圖を共有しつつ、『東方雜誌』は西洋と東洋の調和を主張し、『新青年』はあくまで西洋化を主張したと整理できるだろう。そしてここまで見てきたように、こうした構圖を作り上げたのは、ほかならぬ『東方雜誌』の大戦報道であった。むしろ大戦を契機とした科學・技術振興という當初の『東方雜誌』の意圖を、論理的に忠實に實行したのが『新青年』だったということすらできるだろう。『東方雜誌』を激しく批判した陳獨秀ら自身が、當時の最大手雜誌だった『東方雜誌』から強い影響を受けていたことは、先行研究でも指摘されている。⁽³¹⁾ そしてやはりよく知られるように、新文化運動の目的自體が、ほかならぬ「科學」であった。「科學的であれ、空想的であるなかれ。……近代歐洲が他民族に優越している理由は科學の勃興にあり、その功績は決して人權説に劣るものではなく、この兩者が車の兩輪をなしているのである」。⁽³²⁾ これらの「舊倫理・舊藝術・舊宗教・舊文學・舊政治の破壊という」罪状は、本社同人はもちろん率直に認めてはばからない。しかし元をたどれば、本誌同人に本來罪はなく、ただ德莫克拉西^{デモクラシー}

(Democracy) と賽因斯 (Science) の兩先生を擁護するただけに、これらの驚天動地の大罪を犯したのである⁽³³⁾。ここから、新文化運動の展開過程における、第一次世界大戦という要素の重要性を指摘することができるだろう。

(三) 『科學』の大戦観

大戦と科學の關係を説明する論理としては、以上に見たような『東方雜誌』の立場と『新青年』の立場が當時の中國においては代表的なものと言える。しかしこの兩者のどちらとも異なる、第三の立場を模索した知識人たちもいた。その興味深い一例として挙げられるのが、第一次世界大戦の最中に創刊された、その名も『科學』と題する雑誌である。同誌は、アメリカ留學生の任鴻雋(一八八六一九六二)、趙元任(一八九二—一九八二)、楊銓(楊杏佛、一八九三—一九三三)らが一九一五年一月に創刊した月刊誌で、發行元は上海の科學社である。近代中國の雑誌は總じて短命なものが多いが、その中で中華人民共和國の成立する一九四九年まで三十數年にわたって刊行され続けた稀有な學術誌である⁽³⁴⁾。創刊號では同誌の主旨として「技術や機械であれば小さな話題でも載せるが、社會や政治であれば大きな話題でも書かない、科學かどうか判断し、他の話題には及ばない⁽³⁵⁾」ことを掲げており、實際に同誌に時事問題に關する記事はほとんどない。その數少ない例外となったのが、ほかならぬ大戦と科學の關係という問題であった。

『科學』は「創刊の辭」で科學と戰爭・平和の問題について觸れているが、ここでは科學は平和をもたらすものにはかならないという、非常に樂觀的な見方を表明していた。

まして科學上の發明によつて、交通は大いに開け、世界は一つになり、髪の毛一本引つぱると全身が反應するような感覺は、昔日に倍化しており、狹隘な己が爲の私心は、心の奥から消えてなくなり、博く施して衆を濟う、恩澤は禽獸にまで及び、傷を憐れみ苦難を救うことが、敵にまで施され、四海が一家となり、永遠に平和となる、これはみな科學にのみ求めるべきもので、どうして他の力を借りようか⁽³⁶⁾。

しかし、大戦が激化の一途をたどる中、こうした見方を無条件に受け入れることは困難になりつつあった。そこで『科學』は同年四月の創刊第四號を「戦争號」と題し、政治と科學の關係に關する特集を組むことになる。特集の説明文は次のように述べる。

まさにわが『科學』が神州（中國）大陸に出現したのに、中歐の戰雲はすでに空を破つて起ちのほり、アジア・アフリカに蔓延し、その形勢の巨大さは、ほとんど現在の世界の聰明な思想を飲みつくし、心はからみついて離れず、目を注いで瞬かない。おもうにこれはわが科學の不幸であり、どうして科學者のみの不幸と言えよう。科學そのものもまた、戦争の影響を受けてその進歩を阻まれるからである。……〔布は夏は^{あわせ}拾となり冬は襦袢となるが〕科學もまた然り、常時は靈妙なからくりとなつて効果を發揮し民を豊かにするが、戦時には巨砲利劍となつて殺人掠奪の道具となる。そうであれば科學の有用性を見ようとするとするなら、戦争はその一面である。同人たちは、上述の視點から、今回の戦争を見て、科學と關係すること若干を見つけたので、わが科學を好み戦争を談じる國人においては多少の興味があるかと思ひ、戦争を本號の總題としたのである。⁽³⁷⁾

戦争は科學の進歩を阻むという見方は、『新青年』のそれと正反對である。一方で、大戦を利用して中國に科學に關する知識の普及を圖ることもまた特集の目的であることが明確に述べられており、この點は當初の『東方雜誌』と共通する。續いて、同號の卷頭に掲載された楊銓の「戦争と科學」と題した記事は、この二者の關係を次のように論じる。

戦争は人類の科學應用の始めである、……しかし、科學は戦争によつて存在するわけではない。……したがつて今日の戦争が科學によるものだと言うのはよいが、今日の科學が戦争によるものだと言うことはできない、……戦争は凶事であり、科學がその殘虐さを後押ししている、ならば科學は病原菌や禍の種のようなものではないか？ いやいや、それは一を知つて二を知らないものであり、科學があつて今日があり、科學がなければ今日はない、科學の功罪を見極めるにはまず數百年來の科學の人類に對する功績を見なければならぬ。……科學が戦争を明確に減らした

ということはこれまでないが、世界に戦争が兒戯ではないことを知らしめれば、それによって慎重になり、敢えて輕舉することがなくなる、その功績も忘れてはならない。……今の歐米で世界平和を主張する休戰主義者の理論は多くが科學に基づいている。科學の進行を止めなければ、大同の夢が事實となる一日が最後には訪れるだろう。……したがって科學は戦争の友だが、戦争は科學の敵である。⁽³⁸⁾

科學が戦争に役立つことは否定できないが、科學によって戦争の慘禍を抑制することもできる、だから科學と戦争は必ずしもイコールで結ばれるものではない。ここに見える論理は非常に屈折しており、おそらく當時の讀者から見てもかなり苦しい主張だったのではないかと思われる。

杜亞泉と『東方雜誌』のように西洋⇨戦争⇨科學の價値を否定して東洋文明を對置するわけにはいかず、陳獨秀と『新青年』のように西洋⇨戦争⇨科學を一括して全面肯定することもできなかった『科學』とそこに集った知識人たちは、第一次世界大戦の下で、戦争を否定しつつ科學の必要性を訴えるという苦しい立場をとらざるを得なかったのである。

おわりに

中國における第一次世界大戦報道において一つのキーワードとなったのが「科學」である。辛亥革命を経て近代化を推し進める過程にあつた中國において、何よりも必要とされたのがこの科學であつた。かねてより科學振興を訴えていた杜亞泉が主編を務める『東方雜誌』は、歐洲戦争に動員された科學・技術を詳細に紹介するとともに、これを機に平和に偏つた中國に「尙武」の思想を加え、バランスのとれた發展を目指すことを主張した。ただ、この前提にあつたのは戦争の早期終結と平和の到來という豫想だつた。大戦開始後に創刊された『科學』も、これを科學振興の機會と捉え、またほかならぬ科學によってこそ平和がもたらされると主張した。大戦は科學振興を訴える中國知識人たちにとって、当初はまたとないチャンスと受け取られたのである。「科學」と「民主」を掲げる新文化運動と『新青年』がまさに第一次世界大

戦の最中に始まった背景には、こうした當時の知識界における雰囲気があったと考えられる。

しかし大戦の長期化と泥沼化に伴い、大戦と科学・技術に關する報道は、むしろ科学こそが戦争の惨禍を擴大しているのではないかという疑念を中國の知識人たちにもたらすこととなった。ここにおいて、従來の科学振興を訴えてきた知識人たちはそれぞれに苦しい回答を迫られることとなった。

杜亞泉と『東方雜誌』は、科学と戦争の惨禍を専ら「西洋文明」の問題と位置づけ、精神世界と平和を尊ぶ「東洋文明」をそれと同じレベルにまで持ち上げることで、西洋への一方的な傾倒ではなく、東西文明の調和が必要だとする方向に重心を轉じた。

これに對し、陳獨秀らの『新青年』はより急進的な立場をとった。彼らは科学と戦争を西洋文明、平和を東洋文明に割り當てるという點では『東方雜誌』と同じだったが、平和は停滯をもたらすのみで、戦争こそがむしろ社會の進歩に必要なだとする論理に基づき、戦争＝科学＝西洋を一括して全面肯定する議論を展開した。このように基本的な構圖を同じくしつつ眞逆の立場に立つ『新青年』と『東方雜誌』の大戦觀は正面から衝突せざるを得なかった。

もう一つの立場は『科学』に代表されるものである。社會の發展を目指して科学を學ぶ知識人たちにとって、まさにその科学が戦禍をもたらし文明を破壊している現状は、深刻な問題として受けとめられた。彼らは科学と戦争を可能な限り切り離そうとし、戦争は科学の進歩を妨げる、科学こそが平和をもたらす、と主張したが、一般的に言つてこうした考えが受け入れられる餘地は少なかったと思われる。

こうしたまさに大戦の最中に行われた議論を見ていくと、冒頭に述べた戦後の中國思想界の展開の意味もやや違つたものに見えてくるように思われる。

大戦終結直後、陳獨秀は、聯合國を「公理」（正義）、ドイツを「強權」（暴力）と位置づけ、第一次世界大戦を「公理」の「強權」に對する勝利とみなし、戦後の國際社會において正義（具體的には中國と列強との間の不平等條約の改正）が實現

されると主張した。⁽³⁹⁾ こうしたドイツを一方的に「悪」と位置づける二項對立的思考は、大戦中の「對獨外交」から聯續したものであり、彼の大戦觀の必然的な歸結とも言える。しかしこのような過度に樂觀的な期待が一九一九年のパリ講和會議で裏切られたことへの失望から、北京大學の學生を中心に起きたのが同年の五四運動である。⁽⁴⁰⁾

以後、西歐に失望した『新青年』は、マルクス・レーニン主義をいち早く中國に紹介し、新興のソヴィエト・ロシアへと急速に接近していくことになる。これは、「科學」の範圍を自然科學から社會科學へと擴大し、⁽⁴¹⁾ その上で「科學的社會主義」の立場から、第一次世界大戦を資本主義・帝國主義同士の戦争と位置づけなおした陳獨秀と『新青年』が、⁽⁴²⁾ 西歐の戦争の慘禍と、ソヴィエト・ロシアの科學を切り離す論理を構築することを可能とした。

それゆえに一九二三年、やはり西洋の科學と物質文明の限界を主張する（つまりは本稿で述べた『東方雜誌』に近い立場に立つ）張君勸と、大戦を引き起こしたのは科學に對する無知に他ならないとする（つまり『科學』に近い立場に立つ）丁文江や胡適の間で再び起きた「科學と玄學」論争に際しては、陳獨秀は次のように、大戦がヨーロッパ文明に破綻をもたらしたことを認めつつ、同時に「科學」の立場から「玄學」派を否定することができたのである。

歐洲文化の破産の責任を科學と物質文明に歸すのは、もとより全くでたらめだが、丁在君（文江）がこの責任を玄學家・教育家・政治家の身に歸すのも、事實からかけ離れている。歐洲大戦は明らかに英獨の二大工業資本が世界市場を争い合ねばならないほどにまで發展したことによる戦争である、……我々はいまや丁在君先生や胡適之先生に問わねばならない。「唯物的歴史觀」が完全なる眞理であると信じるのか、それとも唯物以外に張君勸の類が主張するような唯心觀も科學を超えて存在することがあり得ると信じるのか？⁽⁴³⁾

これは第一次世界大戦が中國の知識人たちにもたらした西洋・戦争・科學をめぐるジレンマに對する、當時における一つの解だったとも言えよう。

註

- (1) 小野寺史郎「中國ナシヨナリズムと第一次世界大戰」山室信一、岡田暁生、小關隆、藤原辰史編『現代の起點・第一次世界大戰』一 世界戦争 岩波書店、二〇一四年。
- (2) 衛金桂「歐戰與中國思想界」『甘肅社會科學』第一四二期、二〇〇三年八月、鄭大華「一戰與戰後（一九一八一—一九二七）中國文化思潮的變動」『淮陰師範學院學報（哲學社會科學版）』第二二卷第四期、二〇〇四年四月、などを参照。
- (3) 若林正文「近代中國における總合雜誌——『東方雜誌』解題」東京大學教養學部外國語科『外國語科研究紀要』第二六卷第四號、一九七八年。陶海洋『『東方雜誌』研究（一九〇四—一九四八）』合肥：合肥工業大學出版社、二〇一四年、も参照。
- (4) 王奇生「新文化是如何運動起来的——以『新青年』為視點」『近代史研究』第一五七期、二〇〇七年一月。
- (5) 王元化「杜亞泉與東西文化問題論戰（代序）」許紀霖、田建業編『杜亞泉文存』上海：上海教育出版社、二〇〇三年。
- (6) 大戰期を含む一九二〇年までの『東方雜誌』に轉載された『太陽』の記事については、寇振鋒「中國の『東方雜誌』と日本の『太陽』」名古屋大學大学院國際言語文化研究科『メディアと社會』第一號、二〇〇九年三月、がまともしている。
- (7) 〔張〕君勳倫敦來稿「歐戰雜記」『東方雜誌』第一三卷第三號、一九一六年三月一〇日、など。
- (8) 「雙十節北京試演飛機之攝影」「雙十節汕頭試演飛機之攝影」『東方雜誌』第一三卷第一一號、一九一六年一月一日。
- (9) 陶賢都、邱銳「五四時期『東方雜誌』的科學傳播」『科學技術哲學研究』第二八卷第六期、二〇一一年二月、などを参照。
- (10) 儉父「杜亞泉」「大戰爭與中國」『東方雜誌』第一一卷第三號、一九一四年九月一日。
- (11) 儉父「社會協力主義」『東方雜誌』第一二卷第一號、一九一五年一月一日。
- (12) 儉父「戰爭與文學」『東方雜誌』第二二卷第五號、一九一五年五月一〇日。
- (13) 儉父「靜的文明與動的文明」『東方雜誌』第一三卷第一〇號、一九一六年一〇月一〇日。
- (14) 儉父「戰後東西文明之調和」『東方雜誌』第一四卷第四號、一九一七年四月一日。
- (15) 前掲王元化「杜亞泉與東西文化問題論戰（代序）」、石川禎浩「東西文明論争」「しにか」第八卷第八號、一九九七年八月、などを参照。
- (16) 超然「平和」『東方雜誌』第一二卷第六號、一九一五年六月一日。
- (17) 例えば、坂元ひろ子「解説」坂元ひろ子責任編集『新編原典中國近代思想史四世界大戰と國民形成——五四新文化運動』岩波書店、二〇一〇年、を参照。
- (18) 藤田正典、久保田文次、嶋本信子編『新青年別卷——

- 新青年總目錄・五四運動文獻目錄」汲古書院、一九七七年、二頁。前掲王奇生「新文化是如何運動起來的」も参照。
- (19) 陳獨秀「東西民族根本思想之差異」『青年雜誌』第一卷第四號、一九一五年二月。
- (20) 陳獨秀「一九一六年」『青年雜誌』第一卷第五號、一九一六年一月十五日。
- (21) 劉叔雅(劉文典)「歐洲戰爭與青年之覺悟」『新青年』第二卷第二號、一九一六年一〇月一日。
- (22) 劉叔雅「軍國主義」『新青年』第二卷第三號、一九一六年一月一日。
- (23) 陳獨秀「對德外交」『新青年』第三卷第一號、一九一七年三月一日。
- (24) 陳獨秀「俄羅斯革命與我國民之覺悟」『新青年』第三卷第二號、一九一七年四月一日。
- (25) 例えば、野村浩一「近代中國の思想世界——『新青年』の群像」岩波書店、一九九〇年、一六二—一六五頁。
- (26) 陳獨秀「質問」『東方雜誌』記者——『東方雜誌』與復辟問題一『新青年』第五卷第三號、一九一八年九月十五日。
- (27) 倫父「答新青年雜誌記者之質問」『東方雜誌』第一五卷第一二號、一九一八年二月十五日。
- (28) 陳獨秀「再質問」『東方雜誌』記者」『新青年』第六卷第二號、一九一九年二月十五日。
- (29) 前掲石川禎浩「東西文明論争」。
- (30) 前掲王奇生「新文化是如何運動起來的」。
- (31) 前掲王奇生「新文化是如何運動起來的」などを参照。
- (32) 陳獨秀「敬告青年」『青年雜誌』第一卷第一號、一九一五年九月十五日。
- (33) 陳獨秀「本誌罪案之答辯書」『新青年』第六卷第一號、一九一九年一月十五日。
- (34) 劉敏「民國時期『科學』雜誌研究」內蒙古師範大學博士學位論文、二〇一三年。
- (35) 「例言」『科學』第一卷第一期、一九一五年一月二五日。
- (36) 「發刊詞」『科學』第一卷第一期、一九一五年一月二五日。
- (37) 「本期弁言」『科學』第一卷第四期、一九一五年四月二五日。
- (38) 楊銓「戰爭與科學」『科學』第一卷第四期、一九一五年四月二五日。
- (39) 隻眼(陳獨秀)「發刊詞」『每週評論』第一號、一九一八年二月二二日、など。
- (40) 吉澤誠一郎「公理と強權——民國八年の國際關係論」貴志俊彦、谷垣眞理子、深町英夫編「摸索する近代日中關係——對話と競存の時代」東京大學出版會、二〇〇九年。
- (41) 陳獨秀「新文化運動是什麼？」『新青年』第七卷第五號、一九二〇年四月一日。
- (42) 陳獨秀「太平洋會議與太平洋弱小民族」『新青年』第九卷第五號、一九二一年九月一日。
- (43) 陳獨秀「科學與人生觀序」『新青年』季刊第二期、一九二三年二月二〇日。

they developed over time into the Hundred Cavaliers (*Baiqi* 百騎), then the Thousand Cavaliers (*Qianqi* 千騎), the Left and Right Myriad Cavaliers (*Zuoyou Wanqi* 左右萬騎), and finally were elevated to the status of *Zuoyou Longwujun* 左右龍武軍. The military strength of the Garrison and the Guards was completely reversed by the end of the early Tang period.

On the other hand, the Garrison, *Yulinjun*, which had been the larger sized regiments of the *Beiya*, gradually declined in reaction to the rapid rise of the Guards. Almost all of the *fanjiang* in the *Beiya* held posts in the Garrison, not in the Guards, therefore, the more the Garrison declined, the more the *fanjiang* lost their connection with the emperor. The transition of the *fanjiang*'s characteristics was inextricably linked as a result of this.

In the beginning, the *Beiya* was a system to ensure the lord-vassal relationship between *fanjiang* and the emperor, but it also functioned to concentrate the forces of frontier tribal troops in the imperial court. However, the *fanjiang* were not able to maintain their connection with the Tang political center due to external factors such as the shifting circumstances surrounding the *fanjiang* in line with changes in the international situation, and the internal factor of the decline of the military power of the *Yulinjun* who could no longer provide centripetal force. The central authority of the Tang court to centralize military forces thus collapsed. Consequently, the *fanjiang* began to command forces and tribal troops on the frontier as Military Commissioners, and they took full control of such regional armies. These circumstances can be considered one reason for the occurrence of the An-Shi Rebellion.

THE DILEMMA CAUSED BY THE EUROPEAN WAR AND THE PROMOTION OF SCIENCE : NEWS REPORTS OF WORLD WAR I IN CHINA AND THEIR IMPACT UPON INTELLECTUALS

ONODERA Shiro

In 1914 when World War I began, many newspapers and magazines in China reported on the war, and one of their keywords was “science”. Du Yaquan 杜亞泉, who had argued that science was necessary to modernize China, covered the Western sciences and technologies mobilized for military purposes in his magazine *Dongfang Zazhi* 東方雜誌 (*The Eastern Miscellany*) and advocated military

preparedness 尚武 to a pacifist-leaning China. The magazine *Kexue* 科学 (*Science*), first published in 1915, also regarded the war as an opportunity to appeal to the Chinese people regarding the usefulness of science. This was the atmosphere under which the Chinese New Culture Movement 新文化運動 and the famous *Xin Qingnian* 新青年 (*La Jeunesse*), which flew the flag of “science and democracy,” were also started during the period of the World War I.

However, as the war dragged on and threatened to become a quagmire, Chinese intellectuals started to suspect that it was this very science that exacerbated the disastrous war. Du Yaquan and his *Dongfang Zazhi* also started to see the disaster of war and science as problems of Western civilization, and argued that Eastern civilization, which made a point of spirituality and peace, was the equal of Western civilization in terms of values, and thus the Chinese people should not commit themselves to Western civilization entirely, but harmonize the two civilizations. Contrary to this, Chen Duxiu 陳独秀 and his *Xin Qingnian* insisted that the peace only brought about stagnation, and that war itself was the key to social progress, and totally affirmed war, science, and the Western civilization as a set necessary for human society. *Dongfang Zazhi* and *Xin Qingnian* shared a common framework, but had different views of World War I, so the conflict between the two magazines was unavoidable.

Kexue took another position. It tried to separate science from the war, and insisted that science alone could bring peace. However, it is unlikely that the most Chinese people accepted this idea.

After the war, Chen Duxiu and *Xin Qingnian* introduced Marxist “scientific socialism” into China, and grew close to Soviet Russia. This may have been one of the means for Chinese intellectuals to solve the dilemma involving Western civilization, science and war that the World War I had brought them.